

八戸の歴史双書

『八戸藩遠山家日記』第一巻〜第六巻

福井 敏隆

『八戸藩遠山家日記』は八戸市立図書館所蔵の史料で、平成十四年（二〇〇二）に八戸市文化財に指定された「遠山家旧蔵本」一六七五点の中に含まれる「遠山家日記」を翻刻したものである。「遠山家旧蔵本」は昭和四十九年（一九七四）に遠山景敏氏から同館に寄贈された。

最初に遠山家について簡単に紹介しておく。同家は三代藩主南部通信の時、元禄年間に江戸で二万石の八戸藩に召し抱えられた庄太夫に始まる。当初の知行高は一〇人扶持一〇〇石格式で、幕末期には一二五石の知行を有していた。この時期、同藩の総藩士三七五名中、一〇〇石以上（最高は四〇〇石）は八五名にすぎないので、遠山家は上級藩士に数えられる。初代から五代までの遠山家は江戸定府で、藩主の側に仕える納戸役や用人を勤めていた。六代当主七藏が寛政三年（一七九一）に国元への引越を命じられ八戸城下に移り、同四年には城に近い番丁に住んでいた。以後、七代庄右衛門・八代庄太夫は藩主の側に仕える事もあったが、目付や寺社町奉行など藩の要職を勤めている。行政能力が高く評価されていたためと推定される。以降、九代庄七、十代安次郎と続き、明治維新を迎える。

「遠山家日記」は七代当主庄右衛門が寛政四年（一七九二）から書き始め、大正八年（一九一九）までの足かけ一二八年間、当主が代々書き

継いできたものである。明治以降は武士の日記という性格はなくなるものの、一〇〇年以上の長きにわたって書き継がれた武家の日記は全国的にあまり例がないものと思われ大変貴重である。武士個人の生活記録にとどまらず、八戸藩の政治の動き、江戸時代の経済、社会の動きを知る上でも貴重であるということ、平成二十八年（二〇一六）八月十五日に「遠山家日記」一一一点は歴史資料として県重宝に指定された。日記原本の判型は、文化四年（一八〇七）迄は美濃紙縦帳であるが、以降明治三十九年（一九〇六）迄は半紙横半帳に変わる。基本的には清書している日記である。その後は既製の日記帳やノートを使用している。明治十三年（一八八〇）のものは三種類あり、一冊は縦帳である。また、遠山景輔（十代安次郎の息子）が書いた明治三十九年十二月の冬休み中の日記も含まれている。それでは、各巻の主な内容を紹介しよう。

第一巻は寛政四年から文化六年（一八〇九）までの十七年分（文化五年分は欠本）が収録されている。寛政四年は七代庄右衛門が家督を継いだ翌年にあたる。庄右衛門（初め平馬を名乗る）は六代七藏の養子となつて遠山家を継いだ人物で、実父は藩の家老中里清左衛門であった。日記を書き始めた動機は生家を出て遠山家の当主となつた庄右衛門の決意表明であつた可能性が高い。中里家は城の内丸に屋敷を持っており、頻繁に行き来していた様子が「遠山家日記」（以下「日記」と略記）には書かれている。父や兄多膳と政治向きの話をしたと思われるが、それらの記述はない。正月の年頭祝儀に始まる数々の年中行事、神社の祭礼、冠婚葬祭にまつわる記事が多い。これは「日記」に共通してみられる大きな特徴である。寛政年間には八戸藩の財政状況は非常に厳しく、藩士か

らの借上も多く、天候不順が続く農作物の出来も悪かった。このため遠山家の家計も苦しかった様子が記されている。一方で上級藩士としての体面も保つ必要もあり、久慈と葛巻（共に岩手県久慈市と葛巻町）の知行地の百姓達に手伝い金を出させて、文化三年（一八〇六）には家を新築している。江戸への勤番登りの場合も、藩から舫金もやい金を借りながら、百姓達にも手伝金を出させており、知行地頼みの様子が見て取れる。一方で、年の暮れには、名主や百姓を屋敷に招いて椀飯振舞おわんばんまいを行うなど知行地の経営に気を使っている様子もあり面白い。

第二巻は文化七年（一八一〇）から同十二年までの六年間を収録している。記録者は庄右衛門で、筆まめに冠婚葬祭や年中行事の記事を多く書いている。同九年七月に庄右衛門は寺社町奉行に任じられ法霊祭礼で後乗りをしている。八戸藩では寺社町奉行の役所はなく、自宅で執務している様子が見て取れる。家計の事では、中居林や梨の木平の百姓と、野菜との交換で下肥を渡している記事があり、かなり細かい勘定がなされたようだ。また、庄右衛門の後妻が危篤状態から奇跡的に快方に向かった記事も興味深い。隣家の河内屋が何かと世話を焼いていて、武士と町人という身分関係を超えた繋がりが覗かれる。

第三巻は文化十三年（一八一六）から文政四年（一八二二）までの六年間を収録している。同十二年二月に庄右衛門は江戸勤番となり、以降は長男の万之丞が早死したため、次男で嫡子となった屯たむらが書き継いでいる。しかし、同十四年四月に庄右衛門が八戸に帰って来ると庄右衛門が日記を書き出したようで書体の変化が見られる。文政二年（一八一九）に主法替しゅほうがえ、つまり藩政改革が始まる。庄右衛門は立花文助、野村武

一、嶋守万之丞と共に主法替御用掛に任命され、御調役所ととのえが設立される。しかし庄右衛門は目付役・寺社奉行を解任されてしまう。以降は門番役という閑職を勤めている。野村武一による藩政改革の標的にされたらしい。庄右衛門の娘みえは、七崎屋ななさきの一族松橋甚太郎の妻であり、野村による七崎屋潰しに際し、一族と見なされたためであろう。遠山家にとっては暗い記事が続く。同四年には松橋一族が処分されるが、庄右衛門はすぐに娘みえの離縁を申し入れている。娘が処分されるのを避けるためであった。

第四巻は文政五年から十年（一八二七）までの六年間を収録している。庄右衛門は文政五年に売市御番所から南御門番に勤務が替わっている。庄右衛門は門番勤務をしているものの、病（江戸勤番によって生じた脚気）に苦しむ様子や欠勤が記されるようになる。かくて同八年五月、庄右衛門は隠居し、六月に嫡子の屯が家督を継ぎ八代目当主となった。しかし「日記」は依然として庄右衛門が書いている。この巻の記事の特徴としては、遠山家に女性の駆け込みがしばしば見られたことがあげられる。文政六年十月の是川村館前勘之丞の姪さよ、同年十二月の湊村新丁孝八の娘そよ、同九年八月の十八日町市十郎の弟の嫁、同十年七月の馬喰町新八の嫁とよが駆け込んで来ている。庄右衛門が寺社町奉行を勤めたため、屋敷が駆込寺のようにみなされたためであろうか。

第五巻は天保十二年（一八四一）から弘化四年（一八四七）までの六年間（弘化三年は欠本）を収録している。書き手は屯である。庄右衛門は文政十二年八月に死去した。天保十二年正月に屯は江戸勤番を命じられ、四月に江戸に登った。この旅費や生活費について、知行地の百姓に

手伝金を命じている。江戸では産物取締役に任じられた。大豆・メ粕・鉄を江戸で売りさばく責任者である。そのため大豆やメ粕の値段をこまめに記録しており、父庄右衛門ゆずりの筆まめさが見て取れる。同十三年五月に江戸勤番は終わり、六月に八戸に戻ってくるが、江戸での記録は「江戸勤番日記」と表記されている。同月、屯は寺社町奉行に任命された。江戸では八代藩主信真が隠居し、九代藩主信順（薩摩藩からの養子）に変わる。屯はこの年から庄太夫を名乗る。庄太夫は同十四年にまた江戸勤番が命じられ、養子とした実弟五十三郎を伴った。江戸ではまた産物取締役を命じられた。業務はかなり忙しいようだ。閏九月末の記事では、江戸に運ばれた大豆は一万五〇〇〇石余りで、代金は一万三五〇〇両程だと記している。江戸から八戸に計八〇〇〇両が送金された。

この送金記事は、江戸の「用人所日記」にも国元八戸の日記にも殆ど記載されていないようで、「日記」の記事は重要である。同十五年五月に八戸に戻った。江戸に在る間、大殿（前藩主信真）の住んでいる深川屋敷に出自している記事もあり、藩主信順が八戸に在ることもあって、藩政への指示を受けたものと思われる。弘化二年には実弟の五十三郎が嫡子となり、庄馬と改名している。同四年大殿信真が死去した。庄太夫は老眼となり、眼鏡使用が認められた。しかし、五月には江戸勤番を命じられている。「日記」は嫡子の庄馬がその後を書き継いだ。

第六巻は弘化四年（一八四七）から嘉永五年（一八五二）までの六年間を収録している。弘化四年六月以降、嘉永元年四月までは「江戸勤番日記」であり、庄太夫が書いている。このため、同時期の嘉永元年元旦から五月四日までの「日記」を庄馬が書いている。以降は八戸に戻った

庄太夫が書くという入れ替わりがある。弘化四年六月、江戸に登った庄太夫は、三度目の産物取締役に就任した。そのため、八戸での寺社町奉行の職は解かれた。江戸での任務は気苦労が多かったと思われるが、江戸藩邸の長屋で夕方から将棋を指したり、藩士同士で「八犬伝」等の本の貸し借りをしたり、休日には銭湯へ行ったりと、仕事以外の記述も多い。水天宮・西久保八幡・芝神明等への参詣もしていた。江戸での勤番藩士の生活の一端が見てとれる。嘉永元年の「日記」には四月に八戸で「御国通用金札」（いわゆる藩札）の引き揚げや交換停止の記事が見える。

この事については国元の日記に記載がなく貴重である。八戸に戻った庄太夫は再び寺社町奉行に就任した。この年、遠山家では屋敷の玄関普請をしており、玄関周りを一新した。同二年正月に庄太夫は遊行上人巡国御用掛となった。時宗法主による全国的布教活動であるが、幕府公認を受けているため、各藩でも厚遇をせざるを得なかった。八戸城下には時宗寺院はなく、宿舎の手配や対応等で庄太夫は苦労したものと思われる。九月には長者山で抱相撲の興行があった。八戸藩では、江戸で活躍する力士をお抱えとし、藩の化粧まわしをつけさせて土俵に上げて、八戸の宣伝をしている。この時は一〇〇人ほどが来八し、藩主信順も見物をした。同三年には正月十五日に田植え（えんぶり）が城内の御広舗に上った記事が見える。豊作祈願の行事のため、藩としても城内での演舞を認めていたものと思われる。また、庄馬の嫁が女の子を出産したあと、産婦見舞い客が、棒焼ふ・丸焼ふ・せんべい・蕎麦を持参している記事が目を引く。庄太夫は非番の時、釣りや鴨取りに行くことも多かった。同四年には江戸藩邸の奥向きが完成し、二月の新殿開きの祝儀が行われ

藩主信順がご満悦だった旨の記事がある。十一月には鰯が大漁と聞き、都合四籠分を買っており、「珍しき大鰯の上、油沢山これ有」と記している。食料としてより、灯明用の魚油を絞るために購入したのではなからうか。同五年の記事で注目されるのは、庄太夫が趣味で菊栽培をしている事である。現在、八戸の「市の花」は菊である。八戸地方は江戸時代から菊作りが盛んで、食用の「阿房宮」と観賞用の「奥州菊」が栽培されている。五月に植えた菊を九月に収穫し、手作りの菊の花・あほう（阿房宮）三〇・せいらん（青嵐）二〇を河内屋八十郎ほか六人に配っており、栽培上手であったようだ。十二月には久慈京森村の三年ほど年貢が未納であった百姓に対して、残り二両については二十日までに期日を守り納めるようにと庄太夫が厳しく申し渡している。菊作りに精を出しながらも、地方知行主としての厳しい顔も覗かせている。

以上、既刊の六巻について、気になった内容を紹介してきた。東北の二万石という小藩の武士の生活記録である。内容については備忘のための記録であったり、家の行事等であったりと、必ずしも政治向きの記述は多くないが、藩の公式記録に載っていない記事もある。興味を持たれた方には是非ご一読頂ければ幸いである。残りの分については、明治四年（一八七二）までを今後三冊で刊行する予定とのことである。

なお、平成三・四年（一八九一・二）にかけて青森県文化財保護協会でも『八戸藩遠山家日記』上下二冊が文政十一年（一八二八）から天保十一年（一八四〇）迄の一三年間分を刊行している。合わせて参照をして頂ければ幸いである。

（第一巻、A5判、五八九頁、八戸市立図書館市史編纂室編、八戸市、平成十六年十二月二十四日発行、定価二五七〇円（税込））

（第二巻、A5判、四八三頁、八戸市立図書館市史編纂室編、八戸市、平成十八年一月三十一日発行、定価二五七〇円（税込））

（第四巻、A5判、五〇七頁、八戸市立図書館市史編纂室編、八戸市、平成二十六年九月三十日発行、定価二五七〇円（税込））

（第五巻、A5判、六二五頁、八戸市立図書館編、八戸市、平成二十八年九月三十日発行、定価二五七〇円（税込））

（第六巻、A5判、五九五頁、八戸市立図書館編、八戸市、平成二十九年九月二十九日発行、定価二五七〇円（税込））

※注文については、八戸市内の書店、または八戸市立図書館歴史資料グループ 電話・ファックス（〇一七八）七三―三二三四までお問い合わせ下さい。

（ふくい・としたか 弘前大学国史研究会会員）